

China Medical Board と戦後日本の医学図書館の発展

松村 悠子*

長崎大学附属図書館

I. はじめに

昭和21(1946)年6月28日から29日にかけて、京都府立医科大学中央図書館で、太平洋戦争後初となる第16回医科大学附属図書館協議会が開催された。協議会では、当時の参加館12館の戦争被害状況について、各館から報告があり、原子爆弾により甚大な被害を受けた長崎医科大学附属図書館(現在の長崎大学附属図書館医学分館)をはじめ、戦災により多くの医学図書館は被害を受けた¹⁾。

『日本医学図書館協会六十年略史』掲載の協議会の協議事項および承合事項によれば、戦中における外国雑誌の未着、戦災による資料の消失など、当時の日本の医学図書館は様々な課題を抱えていた。また、昭和36(1961)年および38(1964)年には、日本学術会議が政府に対して大学図書館に関する勧告を行っており^{2) 3)}、医学図書館のみならず、日本の大学図書館自体が欧米諸国に比べて未整備・未発達であった。

このような状況の中、戦後日本の医学図書館界はロックフェラー財団、CIE(GHQ民間情報教育局)、ABCC(原爆傷害調査委員会)、オレゴン大学など海外の団体から助成を受けた。本稿はその中の一つである、China Medical Board(以下、CMB)による助成について、当時の資料や、助成を受けた図書館を訪問し、それをまとめたものである。

CMBは大正3(1914)年にロックフェラー財団の一部門China Medical Boardとして設立された。その名称から中国の組織と誤解されがちだが、CMBはアメリカの団体である。昭和3(1928)年に財団から独立し、China Medical Board, Inc.と名称を変更した。CMBは当初Peking Union Medical College(以下、PUMC)への助成等の事業を行っていたが、昭和26(1951)年に中国共

産党によりPUMCが国有化され、中国への助成が不可能となった。そのため、助成先をアジア地域の医学・看護学教育に広げ、ちょうど戦後復興期にあった日本も助成の対象となった。日本への助成は昭和27(1952)年から49(1974)年にかけて、のべ40校以上の医学部や医科大学を対象に行われた。図書館以外にも、医師や看護師の米国への留学や、大学における研究施設の建設に対する助成等を行った。なお、中国への助成は昭和56(1981)年に復活し、現在も中国や東南アジア諸国の医療政策研究や医学教育への助成を行っている⁴⁻⁶⁾。

CMBによる極東の医学図書館への助成に関しては、福留による論文があるが⁷⁾、福留の論文は極東全域を概説したものであり、日本への助成が行なわれている昭和43(1968)年に発表されたものである。本稿では国内の事例に焦点を絞り、現在の各館における痕跡についても報告する。

II. CMBの医学図書館への助成

当時のCMBのAnnual Reportsによれば、CMBの医学図書館への助成は、Fellowship program, Books and journals, Construction and equipmentの大きく3つに分類できる。それぞれについて、概要と個別に調査した館や人物に関して詳細を述べる。

1. Fellowship program (表1)

Fellowship programでは8名が助成を受け、7名がアメリカに4~24ヶ月、1名が国内に1年間留学した。7名の中には、当時東京大学教育学部図書館学講座担任助教授であった裏田武夫を含めたが、裏田は留学ではなく後述する東大医学図書館建設のための視察旅行であった⁸⁾。

1) 前田正三

長崎大学の前田正三は長崎大学附属図書館医学部分館に籍を置いたまま、慶應義塾大学文学部図書館学科へ1年間留学した。同学科では昭和37年度からロックフェラー財団による生物科学図書館員特別養成プログラム

*Yuko MATSUMURA:ヘルスサイエンス情報専門員(基礎)

〒852-8523 長崎県長崎市坂本1丁目12-4

matsu-y@nagasaki-u.ac.jp

(2015年3月31日 受理)

表1. 留学した図書館関係者

期 間	対 象 者	所 属 (当 時)	留 学 先 等
1957年10月から3ヶ月	裏田武夫	東京大学	医学図書館視察
1963年6月から4ヶ月	沙藤隆茂	九州大学	コロンビア大学
1964年4月から12ヶ月	前田正三	長崎大学	慶応義塾大学図書館学科
1964年9月から24ヶ月	福留孝夫	慶應義塾大学	コロンビア大学
1966年4月から6ヶ月	津田良成	慶應義塾大学	NLM
1966年7月から6ヶ月	渋谷喜雄	神戸医科大学	ワシントン大学
1968年3月から6ヶ月	長尾公司	東北大学	ワシントン大学
1968年11月から6ヶ月	今村慶之助	東京大学	ワシントン大学

が3年計画で実施されており、前田は最終年度に相当する昭和39年度の生物科学図書館現職者研修の研修生であった。この研修で前田は「慶応義塾大学 北里記念医学図書館における文献情報調査活動について」という実習論文を同学科に提出している⁹⁾。

2) 今村慶之助

東京大学医学図書館の今村慶之助は、ワシントン大学医学部図書館および米国国立医学図書館における図書館学と医学文献についての研究・研修のためアメリカへ6ヶ月間留学した¹⁰⁾。今村氏が保管していた当時の資料によれば、留学中には、Library of Congress, National Institutes of Health, New York academy of medicine や Medical library center of New York, Armed Forces institute of pathology research library, Countway library of medicine なども訪問している。

2. Books and journals¹¹⁻¹³⁾

Books and journals では、国内の医学図書館へ新刊書・学術雑誌等が寄贈された。

特に新刊書については、継続的な寄贈が行なわれた。寄贈の方法は、まず各医学図書館へCMBから新刊リスト“Selected list of recent medical publications”が送付されて来る。各館はその中から寄贈する図書を一定金額以内で選択し、後日その図書が直接出版社から各館へ送付されるというものであった。当時の『医学図書館』によれば、1956-57年度の新刊リストから\$350, 1957-58年度から\$400, 1957-59年度は\$400が選択できた。

寄贈を受けた図書館は、札幌医大、東北、新潟、群馬、東大、慶応、慈恵、横浜、新潟、京大、阪大、京府、岡山、徳島、鳥取、九大、久留米、長崎、熊本¹³⁾ などであった。寄贈対象館は、地理的条件および大学図書館活動を参考にして選定された。

寄贈された図書の折返し部分には、“Gift of China Medical Board of New York, Inc.”と印字されたラベルが貼付されている(図1)。このラベルは、寄贈を受け

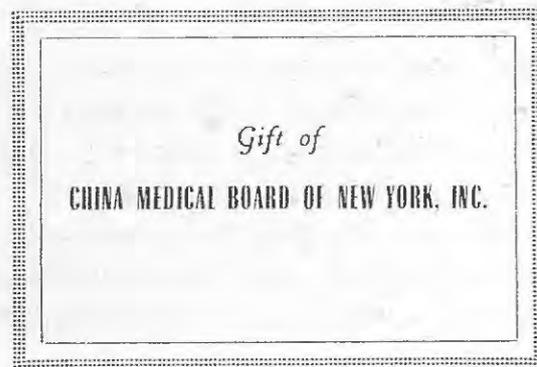


図1. 寄贈図書に貼付されたラベル

た複数の図書館で確認できた。よって、出版社から発送される際に貼付されたと考えられる。

寄贈を受けた図書館の内、札幌医科大学はCMBからの寄贈図書の目録を発行している¹⁴⁾。

1) 京都大学医学図書館保管の新刊リスト

どのような図書が寄贈されたのか。京都大学医学図書館が保管していた昭和31(1956)年9月1日付けの新刊リストを例にとる。この新刊リストは175タイトル190冊、合計\$2,221.25の図書が掲載されている。図書の出版社を多い順に挙げると、Saunders, Blakiston-McGraw, Thomas, Year book publishing, Hoeber, Academic pressであり、アメリカ国内の著名な出版社が参加していたことが分かる。出版年を見るとその名前の通り、発行3年以内の図書が半分を占めていた。単価は最も安いもので\$0.25, 最も高いものは\$116.00であった。

3. Construction and equipment (表2)

1956~63年にかけて、国内7館の建築、2館の増築において、建設費・設備費の助成があった。この時に医学図書館が設置された大学や、全面開架式・中央管理方式へ移行した図書館も多い。

表2. 助成を受けた図書館²⁵⁻²⁹⁾

大 学	助 成 年	助 成 額	内 容	備 考
九州大学 (図2)	1956・59	計\$75,000	医学部分館建設・増築	医学部開学50周年記念
東京大学 (図3)	1957	\$250,000	中央医学図書館建設	医学部100年記念
大阪大学 (図4)	1958	\$50,000	中之島図書館建設	大阪大学医学伝習85周年記念
神戸医科大学 (図5)	1960	\$100,000	附属図書館建設	
慶應義塾大学	1961・63	計\$65,000	北里記念医学図書館増改築	
長崎大学 (図6)	1961	\$50,000	医学部分館建設	
札幌医科大学	1961	\$10,000	図書館増築	
京都大学 (図7)	1963	\$100,000	医学図書館建設	
岡山大学 (図8)	1963	\$120,000	医学部分館建設	医学部創立100周年記念

図2. 九州大学附属図書館医学部分館
医学図書館. 1973:20(2):表紙より図3. 東京大学医学図書館 (竣工当時)¹⁵⁾1) 東京大学中央医学図書館建設^{15) 16)}

Construction and equipmentにおいて最も金額が大きかったのが東京大学中央医学図書館(現:医学図書館)である。東京大学の医学図書館は、それまで各教室に分散していたのを、医学部創立百年の記念事業の一つとして、組織化した近代的医学図書館が建設された。この図書館は、国内のモデル図書館としての役割も期待されていた。CMBはその建設費用の約半分\$250,000を助成するにあたり、以下の提言を示している。

1. 独立棟であること。
2. 当座必要な参考図書を除き、全ての図書を中央化すること。
3. 学部の職員として教授会に出席し、発言しうる資格を有する、訓練された司書によって指揮運営されること。
4. 書籍も雑誌も、いずれも学生も使用しうるように運営すること。
 - (1) 放課後数時間は開館すること。
 - (2) 学生の使用にともないその世話をする十分な職員をもつこと。
 - (3) 学生の使用のための場所を提供すること。
5. CMBは建物ならびに内部施設にたいし50:50の比(同額)で25万ドルまでの寄付を考慮する¹⁷⁾。

上記の提言では、単に図書館の施設としての機能だけではなく、資料の管理の方法や職員、サービス内容に関して

も言及しており、近代的な医学図書館としての在り方について明確な方針を持って助成を行っていたことが分かる。この提言を受けて建設された中央医学図書館は、昭和36(1961)年11月3日に開館した。同日の竣工式では、CMBを代表してChandler McC. Brooks博士も祝辞を述べている。

中核となる図書館専用部分のほかに個人研究室・大小会議室・セミナー室・ラウンジ等が設けられた。図書館専用部分は、全面開架式の採用や書庫内のスタディレッジ(同館書庫に現存する壁面に備え付けの机と考えられる)、保存書庫の設置など当時としては新しい設備が採用された。また、それまで各所に分散していた図書・雑誌の管理や事務組織も統一された。

この図書館は、改築を経て現在も医学図書館として運用されており、図書館の入口の壁面には、以下の文面が記載されている。

この医学図書館は1958年5月7日に迎えた東京大学医学部創立百年を記念するために建設したものでChina medical board of New Yorkから模範的な中央医学図書館の建立のため建設費の半額奇贈の申し入れのあったのが類縁となり国費のほかに学部関係者と有志からの寄贈金を加えて完成した

この医学図書館を医学部総合中央館とも称するのはこの館の理想をあらわしたものでその使命の達成を期待してのことである 1961年11月3日文化の日開館

2) 大阪大学中之島図書館建設¹⁸⁻²⁰⁾

大阪大学では、昭和29(1954)年の大阪大学医学伝習85周年を記念し、医学図書館の建設を計画し拠金を集めていた。これに対するロックフェラー財団・CMBによる医理学合同図書館の設置のアドバイスをを受け、中之島地区にあった医理学系6分館を統合した中之島分館が建設された。

平成4(1992)年4月に吹田の生命科学図書館に移転し、現在は中之島図書館の建物は残っていないが、生命科学図書館には中之島図書館に掲げられていた銘板が保管されている。銘板の文章を以下に挙げる。

大阪大学医学伝習85周年(1954)を記念して 医学部・歯学部・微生物病研究所並びに医学部学友会は医学図書館建設を計画し 拠金を始め 1958年3月には800万円に達した

この熱意は文部省を動かし 同年5月医学図書館建設費として国費658万円が指定配布された これに加うるに同年11月Rockefeller Foundationより10万ドル China Medical Boardより5万ドルの寄付をうけ 理学部・蛋白質研究所を加え共同で運営することになった
着工 1959年2月 延面積 2503 m² 419

竣工 同年11月 鉄筋コンクリート造5階建(書庫6層)

銘板にある通り、大阪大学に対しては、ロックフェラー財団がCMBの倍以上の金額を助成している。昭和35(1960)年3月2日に中之島図書館の開館式が開催され、その際にはロックフェラー財団理事Anderson博士が来賓として出席し、テープカットを行っている。

3) 長崎大学附属図書館医学部分館建設²¹⁾

原子爆弾により甚大な被害を受けた長崎大学附属図書館医学部分館も、新図書館を建設する際に、CMBから内部設備費の助成を受けている。

この図書館は独立棟ではなく、医学部基礎医学教室の一部に増築された。そもそも、長崎大学医学部は昭和

26(1951)年に鉄筋コンクリート3階建ての基礎医学教室3棟の中に図書館も整備されることが文部省で承認されていた。しかし、昭和32(1957)年に文部省の方針が変わったために図書館が整備される前に基礎医学教室の工事が打ち切りとなってしまった。そこで、医学部は文部省へ工事再開の要請を続けるとともに、昭和35(1960)年8月にCMBへ医学図書館建設への助成を要請した。要請は一旦謝絶されたものの、文部省から当初案通りに図書館が整備されることを条件に、書架等の内部設備費\$50,000の助成を受けることとなった。その後、日本政府より昭和37年度予算で図書館建築が承認され、昭和38(1963)年3月に医学部分館が竣工した。同年4月の落成式にはCMBのConnell博士夫妻を招いている。

この図書館の入口には以下のような銘板が掲げられていた。

この図書館の書庫及び閲覧室の内部設備は China Medical Boardより寄贈されたものである

1963年3月

新図書館は、昭和54(1979)年に独立した建物として医学部分館が完成するまで、利用に供された。CMBによる内部設備費で購入した木製の閲覧机や書架の一部は、現在も長崎大学附属図書館医学分館の閲覧室で使用されており、入口にあった銘板は貴重資料室で保管されている。

4) 慶應義塾大学北里記念医学図書館改築^{22) 23)}

昭和12(1937)年10月7日に竣工した慶應義塾大学北里記念医学図書館は、過去2回の増改築でCMBの助成を受けた。昭和36(1961)年に内部の大改装を行い、サービス改善・業務効率化を実現した。この改装では医学図書館員教育のための講義室も設置された。昭和40(1965)年4月には、地階を改修しフォート・フィルムセンターを開設した。センターではマイクロリーダーやテープレコーダー等の機材を購入し、学内に散逸していたフィルムやテープ等の



図4. 大阪大学図書館中之島分館
医学図書館。1970;17(4):表紙より

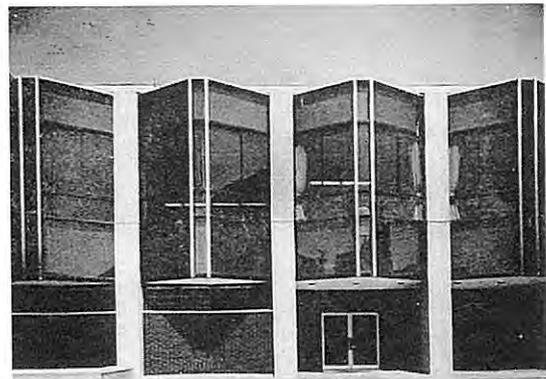


図5. 神戸医科大学附属図書館医学部分館
医学図書館。1971;18(3):表紙より



図6. 長崎大学医学部基礎医学教室 (左手)
2階の一部が医学部分館。



図7. 京都大学医学図書館
医学図書館, 1969;16(4):表紙より

視聴覚資料を集中化し、学内外の利用に供していた。

Ⅲ. おわりに

戦後12館ではじまった日本医学図書館協会の加盟館は、その後多くの医学部・医科大学が新設されたことに伴い、昭和45(1970)年度には50館まで増加した。加盟各館における蔵書数・総面積も増加し、「日本医学図書館統計」によれば、特に総面積平均は昭和25年度から45年度の20年ではほぼ倍増している。これには、Books and journalsやConstruction and equipmentによるものも含まれていることは言うまでもない。

Fellowship programの8名の内、裏田・津田・長尾は後にJMLA名誉顧問にもなった。また、福留と津田を除いた全員が国立大学(1964年に神戸医科大学は国立移管)の所属である。そのため、多くが異動により医学系以外の図書館や他大学へ異動し、彼らが留学で習得した知識やスキルは、医学図書館のみならず大学図書館界全体に広まった。昭和31(1956)年から医学薬学図書館講習会、昭和41(1966)年から医学図書館員研究集会、昭和49(1974)年からは医学図書館員セミナーが開催され、現職者の研修や研究活動が活発に行われるようになった。

以上のとおり、1970年代に日本の医学図書館は戦後復興と近代化を成し遂げたと言えよう。その成長にCMBも一役買ったことは明らかである。

CMBの日本への助成は、昭和49(1974)年で終了した。その2年前の昭和47(1972)年初頭に、東邦大学が医学部図書館建設へ助成の要請を行ったが、“貴国の国運は隆盛で、もはや外国より援助を受ける立場ではないように思う”²⁴⁾との理由により謝絶されている。昭和43(1968)年に、日本のGNPは資本主義国ではアメリカに次ぐ世界第2位となっている。ここまで経済成長を遂げた日本に対して、CMBが助成を打ち切るのも納得できる。

本研究では、約50年前の医学図書館をめぐる活動に

ついて、勤務館をはじめ複数の図書館で調査を行なった。図書館史において各館の事務文書は基礎的な史料となるが、過去の事務文書の扱いは大学によって異なる。今回の調査でも、そのことを実感させられた。勤務館では、2度の引越しを経験しており、事務資料は一定期間が経過すれば廃棄することもできるため、当時の資料でもConstruction and equipmentに関する資料以外はあまり残存していなかった。書庫の狭隘化により、図書館資料の保存スペースすら確保が難しい場合は、過去の事務資料を保管することは現実的ではない。だが、自館史の記録・継承という視点に立って事務資料を整理・保存することも重要ではないかと筆者は考える。

最後に、CMBが助成した医学図書館は20館を下らないにも関わらず、今回筆者が現地調査を実施したのは半分にも満たない。

戦後70年を迎え、戦後史に対する関心も高まっている。今回調査できなかった館を中心に、今後も機会を見つけて調査を継続したい。

謝辞

本研究は、2014年度JMLA研究助成によるものです。現地調査では、東京大学医学図書館、慶應義塾大学信濃町メディアセンター、京都府立医科大学附属図書館、京都大学医学図書館、大阪大学附属図書館生命科学図書館(訪問順)の職員の皆様のご協力をいただきました。また、尾崎聖太郎氏(麻布大学附属学術情報センター)を通じて、今村慶之助氏(元東大医学図書館)から資料を借用するという幸運にも恵まれました。山崎藤子氏(元長崎大医学分館)には、CMBに興味を持つきっかけをはじめ、当時の体験談などをお聞かせいただくなど多くの示唆をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

最後に、本学医学分館のスタッフの皆様の支えなしでは本稿は完成できませんでした。記して感謝します。



図8. 岡山大学附属図書館医学部分館
医学図書館. 1972;19(1):表紙より

主要参考文献

- 1) 戦災被害状況 対処協力ノ問題. 医科大学附属図書館協議会議事録. 1946;16:6-11.
- 2) 日本学術会議. 大学図書館の整備拡充について(勧告). 1961. [internet]. <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/02/05-18-k.pdf> [accessed 2015-05-20]
- 3) 日本学術会議. 大学における図書館の近代化について(勧告). 1964. [internet]. <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/03/06-24-k.pdf> [accessed 2015-05-20]
- 4) Loucks HH. China Medical Board of New York, Inc.. J Med Educ. 1959;34:845-6.
- 5) Fosdick RB, 井本威夫, 大沢三千三. ロックフェラー財団: その歴史と業績. 東京:法政大学出版局;1956.
- 6) Laurie Norris. The china medical board: 50 years of programs, partnerships, and progress, 1950-2000. New York:China Medical Board of New York,Inc.;2003.
- 7) Fukudome T. The China Medical Board and medical libraries in the Far East. Bull Med Libr Assoc. 1968;56(2):150-6.
- 8) 裏田武夫. 再びアメリカの図書館をめぐる. 東洋大学図書館学研究会会誌. 1958;2:1-5.
- 9) 慶應義塾大学図書館学科学事報告. Library science. 1965;3:13-5.
- 10) 今村慶之助. 米国における図書館業務の機械化について.

- 医学図書館. 1969;16(2):103-11.
- 11) 野口迪子. 私の図書館つれづれ(1). 医学図書館. 1991;38(2):160-6.
 - 12) 臨時提案. 日本医学図書館協会総会議事録. 1959;第30回:39-40.
 - 13) China Medical Boardから図書寄贈. 医学図書館. 1957;4(4):246-7.
 - 14) Library SMC. List of books donated by the China Medical Board of New York, Inc. 1961/1963. Sapporo:Sapporo Medical College Library.
 - 15) 東京大学医学部. 東京大学医学部百年史: 東京大学医学部創立百年記念会. 東京:東京大学出版会;1967.
 - 16) 永井克孝. 医学図書館. 東京医学: 東京大学大学院医学系研究科・医学部年報. 1987;94(1):154-5.
 - 17) 今村慶之助. 私の図書館人生. 医学図書館. 1991;38(3):305-11.
 - 18) 土出郁子. 「中之島分館」のころ: [NAKATO NEWS]の記事を中心に. 医学図書館. 2011;58(4):292-6.
 - 19) 浅野次郎. 大阪大学中之島図書館. 医学図書館. 1963;10(1-2):13-6.
 - 20) スマートな五階建 阪大の中之島図書館開館式. 産業経済新聞. 1960年3月23日.
 - 21) 名島仙次郎. 長崎大学医学部図書館. 医学図書館. 1963;10(6):175-8.
 - 22) 谷口真弓. (Ⅱ) 慶應義塾大学北里記念医学図書館. 医学図書館. 1963;10(1-2):5-12.
 - 23) 上釜喬. フォート・フィルムセンターについて. きたさと. 1966;5(1):18-21.
 - 24) 井上英新. 移転, 新築, 再移転. 医学図書館. 1982;29(3):232-45.
 - 25) 田邊文子. 1960年代を回顧して: 医学図書館の近代化と共に歩んだ日々. 医学図書館. 1993;40(3):308-14.
 - 26) 江崎正. (Ⅳ) 神戸医科大学附属図書館. 医学図書館. 1963;10(1-2):17-22.
 - 27) 木田橋喜代慎. VI. 札幌医科大学付属図書館-旧聞・図書館建築始末記-. 医学図書館. 1963;10(4):77-84.
 - 28) 入江昭彦, 伊達恭子, 中院武夫. 京都大学医学図書館について. 医学図書館. 1967;14(4):327-33.
 - 29) 岡山大学医学部百年史編集委員会. 岡山大学医学部百年史. 岡山:岡山大学医学部創立百周年記念会大学;1972.

The China Medical Board and Post-War Developments in Japanese Medical Libraries

Yuko MATSUMURA

Nagasaki University Library. 1-12-4, Sakamoto, Nagasaki 852-8523, Japan

Abstract: From the 1950s to the 1970s, Japanese medical libraries received grants from the China Medical Board. The grants from the board could be roughly divided into 3 categories. In the "Fellowship program," 6 librarians went to American universities to study library science, and 1 librarian went to Keio University library school for 1 year. In the "Books and journals" grant category, many books and journals were supplied to medical libraries. Many publishers delivered new medical books directly to the libraries at each library's request. These books were labeled, "Gift of China Medical Board of New York, Inc." In the "Construction and equipment" grant category, 9 libraries received grants from the board to build

new libraries or to renovate. Some libraries created memorial plates explaining the grants from the board and displaying the plates at their entrances. One of them, the University of Tokyo medical library, received \$250,000 from the board to build the central medical library for the 100th anniversary of the Faculty of Medicine. The board made a contribution to recovery after the war and to the modernization of Japanese medical libraries.

Keywords: medical library history, post-World War II, China medical board, Japan Medical Library Association
(*Igaku Toshokan*. 2015;62(2):151-156)